

一九九九年師走 ⑩「いわゆる散逸物語の研究は」(『散逸した物語世界と物語史』選評と受賞者謝辞)

*一九九八年に刊行した、拙著『散逸した物語世界と物語史』(若草書房)が、一九九九年十二月第二十一回角川源義賞の榮譽に浴した。ここに掲出したのは、贈呈式のパンフレットで賜った秋山虔先生の推薦のことばと私の謝辞である。

〈受賞著作〉推薦のことば

『散逸した物語世界と物語史』

秋山 虔

いわゆる散逸物語の研究は、当初目録の学として近世後半期以来数々の著作を見ることができ、近代になってから松尾聡氏の作業が緒となり、復元の学として数少ない諸家による研究が深められ、物語史の構想に組み入れられるようになった。しかし源氏物語を頂上としてその達成が人々の心を捉え権威づけられて今日まで伝存してきた少数の作品をつなぐ物語史の体系においては、いかにも附随的な扱いであったといえよう。

そうした従来の物語史像に抗い、散逸した物語の世界の研究を推し進め、その地平に視座を据えて物語史を捉えな

おそうとする機運を強力に領導したのが本書の著者神野藤昭夫氏である。

この大著は五章から成る。Iには散逸物語研究の現況を踏まえたうえでの著者の意図・抱負が明確にうち出され、精細を極めた労作である「散逸物語基本台帳」がまず提示されている。IIでは前期物語史の特質が散逸物語「はこやのとじ」の細緻な考究を通して析出され、次いで伊勢物語の位相や蜻蛉日記と物語史との関係が論ぜられ、さらに物語史に基本的発想として貫流する継子譚の定型に照らして源氏物語が俎上にのぼせられた。IIIは齋院文化圏の解明と其処を母胎とする物語若干の復元と意義づけであり、IVは物語史における短編の意義を問う堤中納言物語論と後期散逸物語群の発掘・復元の作業である。精緻周到な運びは規範的といえよう。Vにおいては物語の改作が物語の本源にかかわるとする改作論をはじめとして若干の物語の位相・方法・特質を論じ、室町時代物語への展望に及ぶ。

散逸した物語世界に現存する少数の物語が浮遊しているにすぎないとする、本書における逆転の発想は魅力的であり新しい研究の沃野への方法的道標をうち出すものといえよう。

ひとこと御礼のご挨拶を申し上げます。

受賞者謝辞

神野藤昭夫

昔の話ですが、大学に入ってまもない頃、高田馬場の古本屋で『悲劇文学の発生』という本を見つけてまして、出版人だとはかり思っておりました角川源義という人が若くして学者としての業績を残していることを知りました。昭和五十年十月に浩翰な『語り物文芸の発生』が出ましたときには、それこそ貪り読んで、角川源義なる人物がまことに畏敬すべき学者であることを思い知るにいたしました。しかし、その年の十二月に『幻の赦免船』が出ましたときには、角川源義氏は、既にこの世を去っておられました。『幻の赦免船』は、鎮魂の思い深く読みおえた記憶があります。本日、その角川源義氏を記念する賞を受賞いたしましたことは、私にとりまして、このうえない榮譽であり、深い感激でございます。と同時に二十回に及ぶ角川賞歴代の受賞者とその業績を拝見し、さらに只今は、秋山虔先生から、過分の選評を賜り、正直なところ、身の竦むような思いでおります。

受賞対象となりました『散逸した物語世界と物語史』の内容につきましては、秋山先生がご批評くださったところがございますが、今日まで残されている数多いとはいえない

い物語が、物語史の全容を典型的に反映する作品群であるとみてよいかどうか、あるいは評価という歴史の荒波をくぐり抜けてきた優れた作品であると無条件に認定してよいかどうか、そんな素朴な疑問を抱くことで、物語史あるいは物語というジャンルについて考えてみることをモチーフに一書にしたものでございます。

それには、どうしても、これまで忘れ去られていた中世の物語やありし日の姿を化石のように残す散逸物語の世界を視野に入れなければならない。その結果、残った物語の側からではなく、忘れられたあるいは散逸した物語の側から、物語史の世界を眺めなおしたら、どう見えるだろうか、という発想を逆転させるアイディアを得て、そういうことを夢見るところに、一書としてのオリジナリティを置きたいと願ったわけです。

とは申しませんが、口でいうのはたやすいのですが、所詮は、夢のような願ひなのでありまして、事は地味な実証的方法によつて、足元を固めてゆくほかない。啓示は、その先にしか得られまいと思つたわけですが、その結果、つくづく実感いたしましたのは、自分の研究がいかに先学のお仕事に多くを負っているかということでございます。その意味で、本賞は、これまで見捨てられてきた物語や散逸物語の研究を切り開いて来られた多くの先学たちと榮譽

を分かちあうべきものであると思っております。

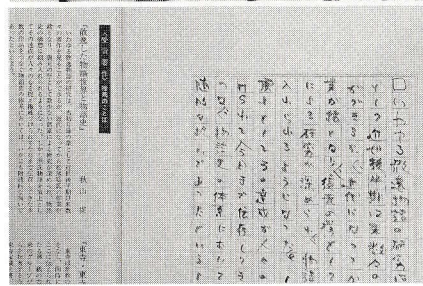
そのうえで、私としては、蜃気楼のように浮かび上がる物語史の輪郭や物語史を突き動かす根源的な力を捉え、日本文学史における物語というジャンルのダイナミズムについて考えたいと思つたわけです。もとより、そうした試みがどこまで成功しているか、おぼつかない気持ちを抱いたまま、昨年二月に発刊にこぎつきました直後に、中国の北京日本学研究中心に赴任していただいす。

出版はしたものの、なんの反響もなく、黙殺されるのをじつと眺めているのはいかにも辛いという気持ちがありました。まして、逃げ出すような気分で、北京に出かけたのですが、七月に帰国いたしましたところ、多くの好意ある評に接しまして、正直なところ、ほつといたしました。そればかりではありません。その後、何人かの方々が本賞の候補としてご推薦下さっているらしいことを仄聞いたしました。それだけで、私には、十分酬いられた、いい夢を見させていたのだと思っております。ところが、朝、目がさめてみたら、それが現実になつていたような気分でございます。

本書を角川賞にご選考くださいました選考委員の先生方をはじめ、諸先生方には、厚く御礼申し上げます。このようにな榮譽をお与えくださることによつて、さらに今後とも努力するようにとの激励と受けとめさせていただくこ

とによつて、角川賞の権威を辱めないようにいたしたいと存じます。

凡庸な私が今日まで、それなりに研究を続けて来られたのは、多くの先輩にあたる先生方や青春をともした研究仲間がいたからであると思っております。ご多忙にもかかわらず、本式にご臨席賜りましたご来賓の皆さまがたに厚く御礼を申し上げます、ご挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございます。



上段、席上謝辞を述べる。下段、パンフレットと秋山虔先生直筆の鉛筆書き「推薦のことば」

角川源義賞贈呈式